

Title	フランス語版『資本論』第一巻第一章「商品」の研究：ドイツ語本文との比較対照
Sub Title	The study of the French version of Das Kapital, vol. I, chap. 1 : commodity, as compared with the German original
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.2/3 (1971. 2) ,p.106(54)- 117(65)
JaLC DOI	10.14991/001.19710201-0054
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710201-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス語版『資本論』第一巻第一章「商品」の研究

——ドイツ語本文との比較対照——

遊 部 久 蔵

ロワによるフランス語版『資本論』第1巻が『資本論』ドイツ語原本第2版とならんで独立の意義を有することは、著者マルクスによって確認されたところである。この研究は、冒頭の第1章「商品」の部分について上記のフランス語版と現行版とを比較対照したものである。もともところいう比較対照はかなり困難である。同じ趣旨の文章であっても独仏両国語の言葉や構文の相異を反映して多少とも相異ならざるをえないであろうからである。したがって精細をきわめるといふことになれば、二つの版の文章を左右に平行的に掲出するとどまってしまうであろう。私は二つの版の文章の比較対照によって気付いた相異のうちから、比較的重要と思われたものをえらんでここに記すこととした。それでもそのなかにはなおあまりに穿鑿にすぎるものもあるであろう。ともかく読者にとって両版の間にこの程度の相異があるという目安として役立てばさいわいである。なおフランス語版と比較対照されるべきものとしては、むしろ刊行時期の近接していたドイツ語第2版がえらばれるべきかもしれない。そこで以下の諸項目において現行版と第2版との相異を〔〕内に指摘しておいた。しかしその数はきわめてすくない。なおフランス語版の本文と現行版の本文との間に相異がなく、この両者が共通に第2版の本文と相異なる箇所もあるが、その数はきわめてすくない、また格別に重要な意義を有するものではない。また附注とししてある部分は、比較対照にかんれんしての私の附記である。フランス語訳本のこの部分についてのマルクスの評価はかなり消極的であるように思われる。これを示すためにつぎに二つの典拠を引用するとする。

1. 1878年11月15日付、ダニエルソンあて手紙においてマルクスはのべている。

「訳者（『資本論』のロシア語訳者——引用者）はたえず入念にドイツ語第2版をフランス語版と比較していただきたい。というのは、後者は多くの重要な変更と追補とを含んでいるからです。（たしかに、往々にして——主として第1章（第2版では「商品」——引用者）で——フランス文では対象を「平面化」"aplatis" [= „verflachen“ ——編者注]) せざるをえなかったとはいえ。」(K. Marx und F. Engels: Briefe über „Das Kapital“. 1954. S. 239. 岡崎次郎訳 p. 277.)

2. 同年同月28日付、同じくダニエルソンあて手紙においてマルクスはのべている。

「最初の二つの編（「商品と貨幣」および「貨幣の資本への転化」）はもっぱらドイツ語原文にしたがって訳されねばなりません。」(K. Marx, F. Engels Werke. Bd. 34. 1966. S. 362.)

以下でとりあげられる主要な文献の標題はつぎのとおりである。

1. ロワ訳とよばれ、この研究で対象とされているフランス語版。Le capital. Par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur. Paris, Editeurs, Maurice Lachâtre. 1875. (記号Fでこれを示す。) ちなみに慶応義塾図書館所蔵のロワ訳には Librairie Du Progrès 刊のもの (函架No. 21X-11-1.) があり、異本である。この両版の比較については、下記のウローエツアの論文および著書中の指示箇所を参照されたい。A. B. Уроева. «Из истории первого французского издания 1 тома «Капитала» Маркса» в кн.: Институт Марксизма-ленинизма при ЦК КПСС. «Из истории формирования и развития Марксизма». Москва. 1959. стр. 384-6. 豊川卓二訳「マルクスの『資本論』第1巻のフランス語初版の歴史から」『産業と

科学』1966年3月。別冊。pp. 109-111. および A. Uroeva: For all Time and all Men. Moscow, Progress Publishers. 1969. pp. 152-4.

2. 現行版。K. Marx: Das Kapital. Bd. 1. K. Marx, F. Engels Werke. Bd. 23. Berlin, Dietz Verlag. 1962. 訳。『マルクス=エンゲルス全集』第23巻。大月書店。1965. (記号Dでこれを示す。)

3. 初版。K. Marx: Das Kapital. Bd. 1. Hamburg. Verlag von Otto Meissner. 1867.

4. 第2版。K. Marx: Das Kapital. Bd. 1. Zweite verbesserte Auflage. Hamburg, Otto Meissner. 1872.

5. カウツキー版。K. Marx: Das Kapital. Bd. 1. Volktausgabe. Herausgegeben von Karl Kautsky. Stuttgart, J.H.W. Dietz. 1914.

6. 英訳。Karl Marx: Capital. Vol. 1. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels. Moscow, Foreign Languages Publishing House. 1961.

7. Gallimard 版。K. Marx: Le capital. Livre Premier. Traduction par Joseph Roy, revue par Maximilien Rubel. Karl Marx (Œuvres. Économie. tome 1. Bibliothèque de la Pléiade). Paris, Éditions Gallimard. 1965.

8. 『経済学批判』。K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie. (1859). K. Marx, F. Engels Werke. Bd. 13. 1961. 杉本俊朗訳。大月書店。1966.

なお1, 2の引用文中のイタリック、ゲシュベルトの部分には傍点を附した。対照のさいの記号の意味を次出の第1節項目2のそれについて例示する。

D. S. 50. ②. Z. 9-10. 訳。P. 48. ——上記の文献リスト中の2のS. 50. 第2パラグラフ。9行目-10行目。同訳。P. 48.

F. P. 14. I. ① L. 11-14. 上記の文献リスト中の1のP. 14. 左欄〔右欄はIIで示す。〕第1パラグラフ。11行目-14行目。

第1節

1. D. S. 49. 訳。P. 47. 第1節標題。「商品の二つの要因 使用価値と価値 (価値実体, 価値量)」

F. P. 13. 第1節標題。「商品の二つの要因 使用価値と交換価値あるいは厳密な意味での価値 (価値実体, 価値量)」

附注。「厳密な意味での価値」(valeur proprement dite)

という表現は他にも、たとえば正誤表 (Errata. p. 351.) によって訂正されるべき第2節冒頭 (p. 16. I. ②.) にもみられる。商品の二つの要因は使用価値と価値とであるから、「使用価値と交換価値」という表現は正確でない。そしてこの交換価値と区別される必要上、価値のばあいには「厳密な意味での」の形容詞が附されたことはいまでもない。なお初版注9につきのようにのべられているのが注目される。「私たちが今後「価値」という言葉をより以上の規定なしに用いるばあいには、いつでも交換価値が問題である。」(S. 4.)

2. D. S. 50. ②. Z. 9-10. 訳。P. 48. 「諸商品の諸使用価値は、一つの独自の学科である商品学の材料を提供する。」

F. P. 14. I. ① L. 11-14. 「諸商品の諸使用価値は、独特の知識の、商業的科学と商業的慣習との材料を供給する。」

ちなみに上の本文にたいする脚注5にも若干の相異がみとめられる。

D. S. 50. Fußnote 5. 訳。P. 49. 「ブルジョア社会では、各人は商品の買い手として百科辞典的な商品知識をもっているという法的擬制が一般的である。」

F. P. 14. I. note 2. 「ブルジョア社会ではだれも法を無視するとはみなされない。——経済的な法的擬制によって、すべての購買者は、諸商品の百科辞典的知識を有するとみなされる。」

3. D. S. 51. ②. 全文。訳。P. 50. 「ある商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨とか、y量の絹とか、z量の金などとか、要するに非常に相異なった割合で他の諸商品と交換される。だから、小麦はただ一つの交換価値のかわりにさまざまな交換価値をもっているのである。しかし、x量の靴墨もy量の絹もz量の金なども、1クォーターの小麦の交換価値なのだから、x量の靴墨やy量の絹やz量の金などは、互いに置きかえられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別されるある内実の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる。」

F. P. 14. I. ②. 全文。「独特の一商品、たとえば1クォーターの小麦は、非常にさまざまな比率で他の諸品物と交換される。しかしその交換価値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金その他で、どんな仕方ですれ

が言い表わされようと、不変のままである。それゆえそれはそのさまざまな表現とは区別されたある内実をもっているはずである。」

附注。ドイツ語本文の冒頭の一句、「ある商品」„eine gewisse Ware“ は、初版、第2版とも「単一の商品」„eine einzelne Ware“ であり、カウツキー版では「特殊の商品」„eine besondere Ware“ である。本文についていえば、フランス語訳の方がわかりやすいといえる。フランス語訳は初版の本文によりちかく、またカウツキー版の本文はこのフランス語訳とほとんどかわらない。

4. D. S. 51. ⑥. Z. 4—S. 52. ①. Z. 1. 訳. P. 51. 「ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の諸使用価値の捨象である。」

F. P. 14. II. ③. L. 6—10. 「だが他方、交換がおこなわれるとき、諸商品の使用価値の捨象がおこなわれるということ、またすべての交換関係がまさしくこの捨象によって特徴づけられているということは、あきらかである。」

5. D. S. 14. ④. Z. 9—14. 訳. P. 52. 「……これらの労働はもはや互いに区別されることなく、ことごとく同じ人間的労働に、抽象的・人間的労働に還元されているのである。」

F. P. 14. II. ④. L. 16—21. 「それゆえ、もはやこれらの労働の共通の性格しかのこっていない。これらの労働はことごとく同一の人間的労働に、そのもとで労働力が支出された独特の形態を顧慮することのない人間的労働力の支出に還元されている。」

附注。Gallimard 版のこの部分 (p. 565.) にたいする編注 1 (p. 1635.) においては、ドイツ語本文中の「抽象的・人間的労働」の「抽象的」という形容詞がフランス語訳中では欠けている点が注目されている。さらにドイツ語本文自体における同一の削除の箇所として二箇所 (D. S. 52, 61. 訳. p. 52, 63.) が指摘されているほか価値形態論中にも再びみられるであろうとのべられている。しかし他の箇所 (たとえば, p. 20.) では、「抽象的・人間的労働」(travail humain abstrait) の語がみられる。

6. D. S. 53. ①. 全文. 訳. P. 52. 「諸商品の交換関係そのものなかでは、諸商品の交換価値は、それらの使用価値にはまったくかわりないあるものとしてわれわれの前に現われた。いま実際に諸労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定され

たとりの諸労働生産物の価値が得られる。だから、商品 (第2版……諸商品) の交換関係または交換価値のうちに表示される共通物は、商品 (第2版……諸商品) の価値である。研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたり、まずこの形態にかかわりなしに考察されなければならない。」

F. P. 15. I. ②. L. 1—3. 「だから諸商品の交換関係または交換価値のうちに見られるある共通物は、諸商品の価値である。」

附注。フランス語版の上文に該当するドイツ語本文の前後の文章は、前者においては省略されており、これにひきつづき改行することなくドイツ語本文のつぎのパラグラフの最初の一文がつづく。

7. D. S. 54. ①. Z. 9—10. 訳. PP. 53—54. 「『諸価値としては、すべての諸商品は、ただ一定量の凝固した労働時間ではない。』」

F. P. 15. II. ①. 上の一文がない。
附注。上のドイツ語本文には脚注 11 の番号が附されて、脚注に典拠の『経済学批判』の該当ページ (S. 18. 訳. p. 28.) が示されている。ちなみに典拠の方の文章では、「諸価値としては」でなく「交換価値としては」とある。フランス語訳にはこの脚注もない。

8. D. S. 55. ①と②との間 (訳. p. 55.) に F. P. 15. II. ③がはいる。曰く「私たちはいまでは価値の実体を知っている。それは労働である。私たちは価値量の尺度を知っている。それは労働時間である。」

附注。Gallimard 版編注 (p. 1635, p. 568 編注 1.) で「このパラグラフはマルクスによってフランス語版のために附加された。」と示されているが、もともと初版のこの箇所 (S. 6.) にある。

9. D. S. 55. ②. Z. 8—13. 訳. PP. 55—56. ここに第4版ではじめて附加されたエンゲルスの本文と脚注 11a とがある。

F. P. 16. II. 上に該当する本文と脚注とがない。

第2節

1. D. S. 59. ①. Z. 4—7. 訳. P. 60. 「しかし、商品の価値は、単に人間的労働を、人間的労働一般の支出を表わしている。」

F. P. 17. I. ④. L. 12—14. 「しかし諸商品の価値は、単に人間の労働を、人間的力一般の支出を表わしてい

る。」

附注。フランス語版の「人間的力一般の支出」の部分には、初版では、「人間的労働力一般の支出」„Verausgabung menschlicher Arbeitskraft überhaupt“ (S. 10.) とある。

2. D. S. 59. ①. Z. 22—24. 訳. P. 60. 「簡単にするために、以下では各種の労働力を直接に単純労働力とみなす。これによってただ換算の労がはぶかれるのみである。」

F. P. 17. II. ④. L. 9—11. 「価値の分析においては、労働力の各々の変種が単純労働力としてあつかわれねばならないという結果になる。」

附注。これについて Gallimard 版. p. 1636 (p. 572. 編注 2.) をみよ。曰く「この文節はドイツ語本文とかなり異なる。……この変更が訳者の仕わざであるということはありそうもない。むしろマルクスは『経済学批判』においてなされた約束を頭に浮かべたと思われるのである。マルクスはそこでつぎのようにのべた。曰く『この還元を規制する諸法則は、まだここでの問題ではない。』(Werke. Bd. 13. S. 19. 訳. p. 29.)」

要するにこの注によれば、マルクスは商品論の部分ではまだ還元について説明できないので、それについてのそこの叙述を簡略にしたということになる。これに関連して Gallimard 版『経済学批判』の部分, p. 282 の編注 1 (p. 1604.) をみよ。この編注によると、上記の『資本論』の本文 (p. 572.) とその編注 (すなわち本附注記載) をみよとあって、つぎのようにのべているのは、注目される。「マルクスが約束をまもらなかったことがみられるであろう。——ただ単にかれが賃労働についての『章』をかかなかつたからである。」(p. 1604.) 以下編者の還元についての見解がのべられているが、これは省略する。(なお Gallimard 版. p. 575. 編注 2. p. 1636 もみよ。)

3. D. S. 60. ③. Z. 1—4. 訳. P. 61. 「したがって、商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ意義を有するとすれば、価値量との関連では、もはや、それ以外には質をもたない人間的労働に還元されているから、ただ量的にのみ意義を有するのである。」

F. P. 17. II. ④. L. 1—4. 上文中、「もはや、それ以外には質をもたない人間的労働に還元されているから」の部分には存しない。

4. D. S. 60. ⑤. Z. 6—9. 訳. P. 62. 「生産力は、もちろん、つねに有目的・具体的労働の生産力であって、

事実上、ただ与えられた時間内の合目的生産活動の作用程度を規定するだけである。」

F. P. 18. I. ②. L. 9—10. 「与えられた時間内における有目的労働の効果は、その生産力に依存する。」

5. D. S. 61. ②. 全文. 訳. P. 63. 「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であって、この同等な人間的労働または抽象的・人間的労働という属性においてそれは商品価値 (Warenwert. 第2版=Warenwert) を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であって、〔第2版ではここに Komma [,] がない。〕この具体的・有目的労働という属性においてそれは諸使用価値を生産するのである。」

F. P. 18. I. ③. 全文. 「以上へのべてあることの結果、つぎのようなことになる。適切にいうと、商品中には二種の労働がないとしても、労働が労働の生産物としての商品の使用価値に属させられるか、あるいはその純粋に客観的表現としてのこの商品の価値に属させられるかにつれて、そこでの同一の労働が自分自身に対立させられる。すべての労働は一面では生理学的意味での人間的力の支出であり、この相等的な人間的労働の資格でそれは諸商品の価値を形成する。他面、すべての労働は、特定の目的によって規定されたかくかくの生産的形態のもとでの人間的力の支出であり、この具体的・有目的労働の資格でそれは使用価値または有用物を生産する。商品は価値であるためにはなによりもまず有用物でなければならないのと同様に、労働は言葉の抽象的意味で人間的力の支出、人間的労働とみなされるためには、なによりもまず有用でなければならない。」

さらに改行してつぎの1パラグラフ (II. ④. 全文.) が附加されている。

「価値の実体と価値の量とがいまや規定されている。あとはただ価値の形態の分析をするだけだ。」

附注。Gallimard 版編注 (p. 575 の編注 1, 2. p. 1636.) によれば、第1のパラグラフのはじめの部分 (「以上へのべてあること……対立させられる。’)とおわりの部分 (「商品は価値であるためには……有用でなければならない。’)および第2のパラグラフ全体がフランス語版のための附加であるとのべられている。たしかにそうであるが、第1のパラグラフのはじめの部分とおわりの部分とは、初版のこの部分 (初版には節の区分はないが、第2節に該当する部分の最終パラグラフ. S. 13.) にある。さらに第2のパラグラフは、初版の第3節に

該当する部分の冒頭 (S. 13.) にある。(双方とも独仏文の間にわずかなちがいはあるが。)

第 3 節

1. D. S. 62. 訳. P. 64. 第 3 節の標題。「価値形態または交換価値」 „Die Wertform oder der Tauschwert“

F. P. 18. II. 第 3 節の標題。「価値の形態」 <Forme de la Valeur>

附注。価値形態と交換価値とが密接な関係を有することはいうまでもない。初版では、つぎのようにのべられている。「価値に交換価値 („Tausch-Wert“) の極印を押すところの価値の形態」 (S. 6.) しかしこの両者はもちろん同一のものではない。フランス語訳の標題は、「価値の形態」にあらためることによって単純明確化した。またフランス語版の第 3 節の標題から「交換価値」が削除された理由は、フランス語版の第 1 節の標題のうちすでに「交換価値」の語がみられるからかもしれない。(前出、第 1 節項目 1 をみよ。)

2. D. S. 62. ①. Z. 4—6. 訳. P. 64. 「それゆえ、それらは現物形態と価値形態という二重の形態をもつかぎりでのみ、諸商品としてあらわれるのであり、あるいは諸商品という形態をもつのである。」

F. P. 18. II. ②. L. 6—9. 「それゆえ、それらはそれらの現物形態とそれらの価値形態という二重の形態のもとに現われるかぎりでのみ、流通の中にはいりるのである。」

3. D. S. 62. ①. Z. 6. 訳. P. 64. 脚注の指示がない。F. P. 18. II. ②. 脚注 1 の指示がある。この脚注 1 は現行版 (D. S. 64. 訳. p. 67.) 脚注 17 に該当する。

附注。この項目は後出の本節、項目 7 と関係している。4. D. S. 62. ④. 訳. P. 65. このパラグラフの冒頭にフランス語版では次の文章がはいる。

F. P. 19. I. ②. L. 1—2. 「総じて諸商品は価値関係以外の関係をそれらの間に有しない。」

5. D. S. 63. 訳. P. 65. A) の見出し。「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」 „Einfache, einzelne oder zufällige Wertform“

F. P. 19. I. A) の見出し。「単純な、または偶然的な価値形態」 <Forme simple ou accidentelle de la valeur>

附注。このようにフランス語版には、第 1 の価値形態について「個別的な」の形容詞が欠けているが、ドイツ語本の初版および第 2 版ではかえって「偶然的な」の形容詞が欠けている。なお初版の価値形態論の附録

では単に「単純な価値形態」とのみしるされている。第 3 版以後現行版のような表現になったのであるが、これはエンゲルスがフランス語版を参照して「偶然的な」を加えたものであろうか？ 価値形態およびその発展についてマルクスよりもより現実的、より歴史的意味を賦与して考えていたエンゲルスには、それはありうべきこととも思われるのである。(もしまかりにそうであるとすれば、「偶然的な価値形態」の意味がマルクスとエンゲルスとにおいてかなり相異なって考えられていたのかもしれない。) ちなみにカウツキー版は現行版と同じであるが (S. 15.), コルシュ版 (Ungekürzte Ausgabe. Herausgegeben von und mit Geleitwort von Karl Korsch. 1932.) には「偶然的な」の形容詞がない (S. 61.)。ちなみに英訳 (p. 48.) では、“elementary or accidental form of value” としるされている。

6. D. S. 64. ①. 全文. 訳. PP. 66—67. 「そこで、ある商品が相対的価値形態にあるか、それとも反対の等価形態にあるかは、もっぱら、価値表現におけるその商品のそのつどの位置に、すなわち、その商品はその価値が表現される商品であるか、それともそれで価値が表現される商品であるかということにかかっている。」

F. P. 19. II. 上文がない。附注。Gallimard 版. p. 578. 編注 1 (p. 1637.) においては、ドイツ語本文が翻訳されている。ちなみにそこでつぎのようにのべられている。「原文にはここにかかり翻訳しがたく、はぶかれた (それは翻訳困難のためか?) 一文節がよまれる。」

7. D. S. 64. ②. 訳. P. 67. ここに注 17 の指示がある。F. D. 19. II. ①. この指示がない。

附注。これは前出の本節、項目 3 と関係している。8. D. S. 65. ②. Z. 4—5. 訳. P. 68. 「この場合には、その(—商品の—引用者) 価値性格が、他の商品にたいするそれ自身の関係によって現われるのである。」

F. P. 19. II. ⑤. L. 8—20. I. ①. L. 2. 「この瞬間から、その(—商品の—引用者) 価値性格が日立ち、他の商品とのその関係を規定する固有の特性として現われる。」

9. D. S. 65. ③. Z. 11—13. 訳. P. 69. 「ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自の性格を現出させる。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を実際にそれらに共通なものに、人間的労働一般に還元するからである。」

F. P. 20. I. ②. L. 11—12. 「それゆえこの方程式

は、リンネルの価値を構成する労働の独特の性格を表わす。」

10. D. S. 65. ③. 訳. P. 69. Fußnote 17a (第 2 版への注) の指示がある。

F. P. 20. I. ②. 上記の脚注の指示がない。附注。この脚注は F. p. 32. I. ①. L. 2. (=D. S. 94. ②. Z. 2. 訳. p. 106.) に指示されており、同頁下段の脚注 1 中にある。後出の第 4 節、項目 9 を参照。

11. D. S. 66. ②. Z. 1—4. 訳. PP. 69—70. 「リンネルの価値関係において上着がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質の物として意義を有するのは、上着が価値であるからである。それゆえ、上着はここでは、価値がそれにおいて現われる物、またはその明白な現物形態で価値を表わしている物として意義を有するのである。」

F. P. 20. I. ④. L. 1—5. 「じっさい、私たちのみとところであるが、上着が等価としてみとめられるやいなや、上着はその価値性格を確証するために旅券をもち必要としない。この役割において上着の固有の実存形態は価値の実存形態となる。」

12. D. S. 66. ③. Z. 5—13. 訳. P. 70. 「そしてリンネルの価値関係においては、上着はただこの面だけから、したがってただ体現された価値としてのみ、価値体としてのみ意義を有するのである。よそよそしい上着の見かけにもかかわらず、リンネルは上着のうちに同族の美しい価値魂を見たのである。とはいえ、リンネルにたいして上着が価値を表わすということは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしには、できないことである。こうして、個人 A が陛下としての個人 B にたいして態度をとるということは、同時に A にとっては陛下が B の姿態をとり、したがって顔つきや髪の毛やその他なお多くのものを国王が替わることに取り替えることなしには、できないのである。」

F. P. 20. I. ⑤. L. 6—19. 「そしてリンネルの価値関係においては、上着は他の物を意味しない。よそよそしい上着の見かけにもかかわらず、リンネルは上着のうちに価値の満ちた姉妹魂をみとめたのである。これは事柄のプラトニックな側面である。じっさいには、上着は価値が同時に上着の外観をとることなしには、その外部的関係において価値を表わすことができない。こうして個人 A が個人 B にたいして陛下を表わすことは、陛下がただちに B のみとところで B の姿や肉体をかざることなしには、できないのである。陛下が君主

があたらしくなるたびごとに顔つきや髪の毛や他の多くの物を変えるのは、多分、そのためである。」

附注。このフランス語訳文中の「個人 A が個人 B にたいして陛下を表わすことは……できないのである。」の原文は、<le particulier A ne saurait représenter pour l'individu B une majesté> であるが、これがドイツ語本文中の「個人 A が陛下としての個人 B にたいして態度をとるということは、……できないのである。」の原文、<kann sich das Individuum A nicht zum Individuum B als einer Majestät verhalten> と同じ意味とはどうしても理解しがたい。そこでむしろ「個人 B が個人 A にたいして陛下を表わすことは……できないのである。」というふうに A と B とをおきかえた方がよくないであろうか？ 同じ意味でつぎの「陛下がただちに B のみとところで」 <la majesté aux yeux de B ……immédiatement> とあるのも B ではなく A の方がより適当であろう。このばあい、A = 臣民 = 相対的価値形態にある商品 (リンネル)、B = 国王 = 等価形態にある商品 (上着) を意味し、さらにたちいっていえば陛下は価値、国王は等価形態にある特定の商品の意味しているのである。ただしこれは A と B との関係をドイツ語本文のとおりにとってのことである。すなわち A を価値関係における左辺におき、B をその右辺において考えてのことである。だがもしこの関係を顛倒して解し、A を右辺に、B を左辺において考えると、上のフランス語訳文の変更は、「B の姿や肉体」を「A の姿や肉体」とあらためれば、十分であるということになる。じじつ英訳 (pp. 51—52.) ではつぎの如く、A、B がドイツ語本文とは逆に国王、臣民をあらわすかのように理解されている。すなわち、つぎのとおりである。“A, for instance, cannot be ‘your majesty’ to B, unless at the same time majesty in B’s eyes assumes the bodily form of A, and, what is more, with every new father of the people, changes its features, hair, and many other things besides.” ロワ訳による Éditions Sociales 版 (tome 1. 1959.) 訳文 (p. 66.) も、Gallimard 版訳文 (p. 581.) もこの点英訳と同じで、「A の姿や肉体」とあらためられている。(なおロワ訳文と Gallimard 版訳文との間に一個所、語順の相異がある。) しかし Garnier-Flammarion 版 (Traduction de J. Roy. Chronologie et avertissement par Louis Althusser. 1969.) 訳文 (p. 53.) では、ロワ訳と同じく「B の姿や肉体」とある。なおカウツキー版を底本として——カウツキー版のこの本文は現行版のそれと同じである。——訳された

河上肇・宮川実共訳本(1931. p. 98.)では、この部分はずつぎのようになっている。「それは譬へば、個人A〔Bの誤記か? 英訳にはBとしてある——訳者〕にとって、陛下という資格が同時に個人B〔Aの誤記か? 英訳にはAとしてある——訳者〕といふ肉体の姿をとり、かくて容貌や毛髪やその他の多くのものが国王の代はる度毎に変わるでなければ、個人Aは個人Bに対し陛下としての態度をとりえないのと、同じである。」これについては、同じくカウツキー版を底本として訳された岡林辰男訳註『対訳・註解資本論』第1分冊(1936)訳註(pp. 12-13.)では、つぎのように批判されている。「Individuum B als einer Majestät……その einer Majestät は Dativ で Individuum と同格。原文でAとBとが入れちがっているなどと言ふ(高島、河上、英訳など)のは Majestät が女性名詞であることを忘れたもので、驚くべき文法的無知と言はねばならぬ。」しかしこの批判は英訳については——上記のように解釈するかぎり——あてはまらぬであろう。ちなみにロスドルスキーの書物でもドイツ語本文中の「Bの姿態」が「Aの姿態」とあらためられている。(R. Rosdolsky: Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen »Kapital«. 1968. S. 155. Fußnote 58.)

13. D. S. 67. ②. Z. 3-5. 訳. P. 71. 「商品Aが、価値体としての、人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。」

F. P. 20. II. ③. 上文は欠けている。

14. D. S. 67. 標題. 「b) 相対的価値形態の量的規定性」

F. P. 20. II. 標題. 「B相対的価値の量的規定」(正訳表 [p. 351.] によって訂正したもの)

附注。これはフランス語版の方がより正確な表現であるように思われる。英訳もフランス語版と同じで、「(b.) Quantitative determination of Relative value」とある。(p. 53.)

15. D. S. 67. Fußnote 18. Z. 3-6. 訳. PP. 71-72. 「人間ベテロは、かれと同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、またベテロにとっては、パウロがすっかり、そのパウロ的な肉体のままで、人間という種属の現象形態として意義を有するのである。」

F. P. 20. II. Note L. 5-6. 「同時に、この他のものはすっかり、かれにとって、人間種属の現象形態の

ようにみえるのである。」

附注。独文のベテロ=相対的価値形態にある商品(リンネル)、パウロ=等価形態にある商品(上着)、独文の「人間(という)種属」=価値、仏文の「この他のもの」=等価形態にある商品(上着)。

16. D. S. 69. Fußnote 20. (第2版への注) Z. 1-3. 訳. P. 74. 「このような価値量とその相対的表現との不一致は、俗流経済学によっていつもながらの明瞭さで十分に利用されてきた。」

F. P. 21. II. Note 1. L. 1-2. 「主としてリカード価値論に反対した一著書においてつぎのように読まれる。」

17. D. S. 70. 標題「3. 等価形態」

F. P. 21. II. 標題「c) 等価形態とその諸独自性」

18. D. S. 70. ①. Z. 6-8. 訳. P. 75. 「だから、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうということを通じて表現するのである。したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。」

F. P. 21. II. ④. 全文. ⑤. L. 1-9. これは上の独文の「……表現するのである」と「したがって、……」とのあいだにはいる。「諸価値であるかぎり、すべての諸商品は一つの同一の単位、人間的労働の相等しい諸表現であり、相互に取って替わりうるものである。その結果、一商品はそれを価値としてあらわれしめた一つの形態を有するから、他の一商品と交換されうるのである。」

一商品はそれが等価であるすべての他の商品と直接に交換されうるのである。換言すれば、それが価値関係において占める位置がその現物形態をして他の商品の価値形態とするのである。それは他の商品の価値として現われるために、かくの如きものと同じように値し、その結果後者と交換されうるために、その現物形態と相ことなる形態をおびる必要がないのである。」

附注。Gallimard 版. p. 585. 編注1 (p. 1637.) は、上記のフランス語版の文章のほかに、ドイツ語本文の「したがって……」以下もドイツ語本文に欠けているかのように指摘しているのは、不正確であるといわねばならない。

19. D. S. 70. ③. Z. 11-12. 訳. P. 76. 「一商品の等価形態はむしろなんらの量的な価値規定をも含んではいないのである。」

F. P. 22. I. ②. L. 19-22. 「ところで等価形態のもとにおいては、一商品は、まさにその価値量が表わ

されないからある物質の単なる量として現われるのである。」

そしてドイツ語本文にはないつぎのような3行の文章が改行の上で附加されている。これが③となる。「等価形態の包含する諸矛盾は、いまやその諸独自性のより徹底的な検討を必要とする。」

20. D. S. 71. ①. Z. 1-8. 訳. P. 76. 「商品の現物形態が価値形態になるのである。だが、よく注意せよ。この取り替えが一商品B(上着や小麦や鉄など)にとって起きるのは、ただ任意の他の一商品A(リンネルなど)が商品Bにたいしてとる価値関係のなかだけのことであり、ただこの関係のなかだけのことである。どんな商品も、等価物としての自分自身に関係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は他の商品を等価物としてそれに関係しなければならぬのである。すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならぬのである。」

F. P. 22. I. ⑤. L. 6-10. 上文の「……ただこの関係のなかだけのことであり」と「どんな商品も……」とのあいだに次の文章がはいる。「孤立して考えれば、たとえば上着は全くリンネルのように一有用物、一使用価値にすぎない。その形態は独特の種類の商品の現物形態にすぎない。」

21. D. S. 73. ①. 訳. P. 79. この第1パラグラフのおわりにフランス語版ではつぎの追加がある。

F. P. 23. I. ④. L. 15-17. 「こうして裁縫師の労働はそれ自身の抽象的性質の単純な表現に変形されている。」

22. D. S. 73. ②. 訳. P. 79. 「だから、具体的労働がその反対物である抽象的・人間的労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の独自性である。」

F. P. 23. I. ②. 上文はドイツ語本文のS. 72の①と②との間(訳. p. 78.)に該当。「等価形態の第二の独自性」の見出しのもとにおかれている。

附注。21, 22を関連させて考えると、いわゆる等価形態の第二の独自性といわれているものが、等価形態に位する商品内部の関係であるということがわかるであろう。すなわち上着に体现されている具体的労働、裁縫労働と同じくその価値の実体である抽象的・人間的労働の現象形態(フランス語版では「表示形態」<la forme de manifestation>)になるということなのである。この点は第一の独自性の理解にも関連してくるのであ

るが、私は旧著『価値論と史的唯物論』(1950. 弘文堂)第4章において誤解をしるしたことをみとめなければならぬ。

23. D. S. 76. ②. Z. 5-8. 訳. P. 83. 「それゆえ、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態であるということになり、したがってまた商品形態の発展は価値形態の発展に一致することになるのである。」

F. P. 24. II. ②. 全文. 「労働生産物は、その価値がその現物形態と対立する交換価値の形態を獲得するやいなや、その結果、労働生産物がこのような対立物(商品の現物形態と交換価値の形態——引用者)が、そこに基礎づけられているところの統一物として示されるやいなや、商品形態を獲得する。それからつぎのことが結果する。すなわち商品の価値がおびる単純な形態は、同時に労働生産物がそこで商品として現われる原始的な形態<la forme primitive>であり、また商品形態の発展が価値形態の発展と歩調を揃えるということである。」

附注。ドイツ語本文では照応するといわれている商品形態、価値形態の発展が単に論理的なものであるのか、または論理的=歴史的なものであるのかが明白でないが、フランス語版では「原始的な」という形容詞が用いられている点でそこに歴史的意味が内含されているように思われるのである。この点は価値形態論の理解にとってきわめて重要な点である。

24. D. S. 76. Fußnote 22a. 第2版への注. 訳. P. 84. F. P. 24. この注はない。

附注。Gallimard 版編注には、これがある。p. 593. 編注1 (p. 1638.)

25. D. S. 78. ③. Z. 4-9. 訳. PP. 86-87. 「第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値諸表現の多彩な寄木細工をなしている。最後に、それぞれの商品の相対的価値が、当然そうならざるをえないこととして、この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態ともちがった無限の価値諸表現の系列である。」

F. P. 25. I. ⑥. L. 7-11. 「もしその上、そうならざるをえないのであるが、この形態がすべての種類の商品に適用されて一般化されるならば、けっきよ、諸商品があるのと同じほどの価値諸表現のいろいろな際限のない系列がえられるであろう。」

26. D. S. 82. Fußnote 24. Z. 6-8. S. 83. Z. 10. 訳. PP. 92-93. 「商品生産に人間の自由と個人の独立と

の頂点をみる小市民にとっては、この形態につきもののいろいろな不都合、ことにまた諸商品の非直接的交換可能性から免れられようということは、もちろん非常に望ましいことであろう。この俗物的ユートピアの潤色がブルードンの社会主義なのであるが、それはほかのところでも示したように、けっして独創という功績などのあるものではなく、むしろかれよりずっと前にグレイやブレイや他の人々によってもっとずっとよく展開されたのである。こういうことは、このような知恵が今日でもある種の仲間のあいだでは「科学」という名のもとに流行することを妨げないのである。ブルードン学派ほど「科学」という言葉を乱用した学派はかつてなかった。なぜなら、「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまくまにあうようにやってくる」からである。

F. P. 27. I. Note 1. L. 10—21. 「しかしじっさいは一般的相対的価値形態と一般的等価形態とは、諸商品の同一の社会的関係を相互に前提したり排斥したりする二つの対立する極である。

この諸商品間の直接的交換の不可能性が生産の現実の形態に結びついた主要な不都合の一つであるが、しかしこの生産の現実の形態のうちブルジョア経済学者は人間の自由と個人の独立との頂点をみるのである。この障碍を征服するためにユートピア的な無用な多くの努力がこころみられた。私はブルードンがこのこころみにおいてブレイ、グレイおよび他のものたちによって先行されたことをほかのところでも示した。」

附注。ドイツ語本文の「小市民」がフランス語版では「ブルジョア経済学者」とあらためられており、またブルードンにたいする批判がフランス語版では控え目になっているのが注目されるであろう。Gallimard版(p. 601.)の編注1(p. 1638.)では、ロワ訳では欠けているおわりの部分の訳文と、ブルードンの先行者たちへの言及の典拠(『経済学批判』、『哲学の貧困』)とが示されている。

27. D. S. 83. ①. 訳. P. 93. 冒頭につきのフランス語版6行分がはいる。

F. P. 27. I. ④. L. 1—6. 「それ故、この形態IIIのもとにおいては、諸商品の世界は、すべてのそれに属する諸商品が等価形態から、またはそのもとのそれらが直接的に交換可能である形態から排除されているが故にのみ、社会的一般的な相対的価値形態を有するのである。」

28. D. S. 84. 標題。「D) 貨幣形態 (Geldform)」

F. P. 27. II. 標題。「D) 貨幣形態 (Forme monnaie ou argent.)」さらにこの標題には脚注1の指示が附せられていて、同頁下段につきのような脚注1がのべられている。「ドイツ語、《Geld, Geldform》の正確な翻訳は困難を呈する。《forme argent》という表現は、貴金属は別としてすべての諸商品に無差別に適用される。たとえば、読者の精神にある混乱を惹き起すことなしにつきのように言うのは不可能である。《forme argent de l'argent》(これは「銀の貨幣形態」と訳せばよいが、「銀の銀形態」または「貨幣の貨幣形態」と訳すと、わけがわからなくなるという意味。——引用者)あるいはまた《l'or devient argent》(これは「金が貨幣となる。」と訳せばよいが、「金が銀となる。」と訳すと、わけがわからなくなるという意味。——引用者) さて (Maintenant. Gallimard版では Par ailleurs [一方からいうと]——引用者) 《forme monnaie》という表現は、フランス語で《monnaie》という言葉がしばしば貨幣の意味で使用されていることから生じる他の不都合を呈する。私たちは《forme monnaie》と《forme argent》という言葉の場合に応じて、しかしつねに同じ意味でかわるがわる用いる。」

附注。上記の脚注には Gallimard版(p. 602.)ではつぎのような編注1(p. 1638.)が示されている。「この注はもちろんドイツ語本文にない。」さらにひきつづき『経済学批判』(同巻所収)p. 380. 編注2(p. 1612.)の参照をもとめているので、これをみるとつぎのとおりである。「『資本論』のドイツ語本文におけると全く同様に『経済学批判』のドイツ語本文においても《Geld》という見出しをつけられた同一節は、ロワの翻訳では、《La monnaie ou l'argent》と示されている。《Geld》は単に argent (銀) の貨幣的形態を意味している。」ちなみに『経済学批判』でも『資本論』でも貨幣論の見出しにおける „Geld“ と „das Geld“ とが決定的な区別を有することは周知のところであるが、『経済学批判』Gallimard版では前者は《l'argent》、後者は《la monnaie》と訳されているが、『資本論』Gallimard版ではロワ訳と同じく前者は《la monnaie ou l'argent》、後者は《la monnaie》と訳されている。

29. D. S. 84. D) 貨幣形態の式。

F. P. 27. II. 同上。

貨幣形態を示す式において左辺(相対的価値形態にある商品)の最後に etc. がフランス語版にあって、ドイツ語本文にない。しかし貨幣形態の式において左辺が商品世界を示す意味では etc. がそこにあつた方がよい。但しドイツ語本文の C) 一般的価値形態を示す式の左

辺や B) 拡大された価値形態を示す式の右辺には etc. が示されている。なおこまかいことをしるすようであるが、B) 式の右辺、C) 式の左辺、この D) 式の左辺において「1クォーターの小麦」がフランス語版には欠けている。

30. D. S. 85. ①. 第3節の本文の最後の部分に脚注の指示が附されていない。

F. P. 28. I. 第3節の本文の最後の部分に脚注1の指示が附されていて、下段に脚注1がある。

附注。この脚注は、Gallimard版(p. 604.)編注1(p. 1638.)に示されているようにドイツ語本文の脚注32(S. 95. 訳. pp. 108-9.)に該当する。(後出、第4節の項目10参照。)これは古典経済学の根本欠陥として価値形態論の欠如とその理由とを明白にしたものであるが、拙稿「『経済学批判要綱』における商品論」(本誌. 1970年5月号. p. 12.)にも示してあるようにむしろ価値本質論の欠如とその理由とをも明白にしたものとして価値本質論をのべている第4節に所在した方がよりふさわしいであろう。ちなみにこの脚注は初版では第3節に該当する部分(初版には節の区分がない。)の最後にある。この脚注の文章(とくに後半)の細部の点で独仏文の間に若干の相違があるが、ここではふれない。

第4節

1. D. S. 85. Fußnote 25. 訳. P. 96. 「ほかの世界がすべて静止しているように見えたときに、シナと机とが踊りだした——ほかのものを励ますために——ということが想い出される。」

F. P. 28. II. この脚注はない。

附注。ただし Gallimard版にはこの脚注がある。(p. 605. note a.) さらにつぎの編注がある。(pp. 1638-9.) 「イタリアックでの言葉(「ほかのものを励ますために」の部分——引用者)は、原文においてフランス語である。この脚注はあきらかに1850年以来南支が舞台であった反乱運動、とくに1864年にはじめて決定的に壊滅された太平帝国の反乱のことを暗にのべている。1848—1849年以後、神秘主義がヨーロッパの貴族階級において流行した。」

2. D. S. 86. Fußnote 26. 訳. P. 97. 「第2版への注。古代ゲルマン人のもとでは、1モルゲン土地の大きさが1日の労働によって計られ、したがって1モルゲンは Tagwerk [1日の仕事] (また Tagwanne) (Jurnale または jurnalis, terra jurnalis, jurnalis または

diurnalis), Mannwerk [男1人の仕事], Mannskraft [男1人の力], Mannsmaad [男1人の草刈り], Mannshauet [男1人の刈取り] 等々と名づけられた。Georg Ludwig von Maurer, „Einleitung zur Geschichte der Mark-, Hof-, usw. Verfassung“, München 1854. p. 129 sq. をみよ。」

F. P. 28. II. Note 1. 「古代ゲルマン人の間では1アルパンの土地の大きさが1日の労働によって計算され、それからその名称、Tagewerk, Mannwerk, 等 (Jurnale または jurnalis, terra jurnalis または diurnalis) がうまれた。ついでながら土地の《journal》という表現はなおフランスのいくつかの諸部分で存続している。」

附注。Gallimard版の脚注(p. 605. Note b.)も上文と同じ。ただし Maurerの著書名のみを編注(p. 1639.)にうつし、つぎのように示されている。「マルクスはこの著書(Maurerの上記の著書——引用者)を1868年によみ多大の採録をした。」アムステルダム社会史国際研究所に保存されている採録目録についてみると、たしかにマルクスは1868年に採録帖、B104に25ページ分、さらに19ページ分、Maurerの同書より採録している。

3. D. S. 86. ③. Z. 1—8. 訳. PP. 97—98. 「だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるのである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を諸労働生産物自体の対象的性格として、これらの諸物の社会的自然属性として反映する、したがってまた、総労働にたいする諸生産者たちの社会的関係をも諸対象のかれの外に実存する社会的関係として反映するというのである。このような置き替えによって、諸労働生産物は諸商品になり、感覚的で超感覚的または社会的な諸物になるのである。」

F. P. 28. II. ④. L. 8—11. 「なぜこれらの諸生産物が諸商品に、換言すれば感覚的で超感覚的な諸物あるいは社会的な諸物に変わるかの理由は、その点に存するのである。」

附注。フランス語版で「その点」と示されている部分は、ドイツ語本文において上文のもう一つ前のパラグラフに示されていることを指す。フランス語版ではこの前のパラグラフの次に改行することなくすぐつづけて上の文章がおかれている。しかしドイツ語本文にあってフランス語版において省略されている部分——すなわち「だから、商品形態の秘密は……反映するというのである。」の部分——は、内容上その前のパラグラフでのべられていることとくりかえし

であるから、フランス語版では省略され、改行されなかったのかもしれない。したがって上記の削除を単に削除として指摘されている平田氏のよみかたには賛同しがたい。(平田清明「物神性の再発見」, 下. 『思想』1969年11月号, p. 111.)

4. D. S. 87. ②. 全文. 訳. P. 98. 「このような商品世界の物神的性格は、前の分析がすでに示したように、諸商品を生産する労働の独自の・社会的性格から生ずるのである。」

F. S. 29. I. 上文はない。

附注。この重要な一文がフランス語版に欠けているのはおかしいが、「前の分析がすでに示したように」としてされているように、くりかえしとなることをさせたのかもしれない。その点では、さきの項目3における欠如と同一の理由がらかもしれない。

5. D. S. 88. ①. Z. 2—8. 訳. P. 99. 「私的生産者たちの頭脳は、かれらの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易で、生産物交換で現われる諸形態でのみ反映し、——したがって、かれらの私的諸労働の社会的に有用な性格〔第2版. 「社会的・有用的性格」〕を、労働生産物が有用でなければならない、しかも他人のために有用でなければならないという形態で反映し、——異種の諸労働の相等性という社会的性格を、これらの物質的に相異した諸物の、諸労働生産物の、共通な価値性格という形態で反映するのである。」

F. P. 29. I. ③. L. 27—30. ④. L. 1—II. ①. L. 1. フランス語版には、上記のドイツ語本文の前につきのような文章があって、これはドイツ語本文には欠けている。「非常にさまざまな労働の諸生産物を対等に相互に向きあって置いてこの還元をおこなうのは、交換のみである。」

そして上記のドイツ語本文に該当する部分は改行されてつぎの一文があるのみである。

「私的労働の二重の社会的性格は、実際の交易、生産物交換がそれに刻印する形態のもとでのみ生産者の頭脳に反映する。」

附注。この項目とさきの3、4の項目とにおけるフランス語版のありかたからみて、商品を生産する労働の「独自の・社会的性格」 („eigentümlicher gesellschaftlicher Charakter“ または「独自の社会的な性格」 „spezifisch gesellschaftlicher Charakter“) ——これから商品の物神的性格が発生する。——のうち、「社会的性格」に附属する「独自の」意義——私的労働の社会的有用的性格が商品の社会的使用価値として、私的労働の相等

性が商品の価値としての相等性として現われるということ——がドイツ語本文におけるように明確にこそ示されていないが、第4節全体としてこの前後の叙述をみれば「独自の」意義がマルクスによって全く叙述の上で削除されているとは思われない。商品の物神的性格は商品を生産する労働の「社会的性格」からではなく、まさに「独自の・社会的性格」から生まれるからである。後者をとりあげることなしに物神性論の展開が全く不可能となることはあきらかである。だからここでの「独自の意義」についての叙述の欠如は、削除と解すべきではなく、当該部分における叙述の簡略化とみるべきであろう。さきの項目3、4における私の解釈がこのばあいにも該当するであろう。この点についての平田氏の見解には賛同できない。氏は曰く。「この一節(本項目のドイツ語本文——引用者)はフランス語版で削除されている。この削除が意識的におこなわれたものであることは、ほとんど疑う余地がない。この文章とほぼ同じ趣旨の、他の個所での左記の一節(項目3であつた一節——引用者)もまた削除されていること、そして、この二つの削除を除いてはフランス語版の物神性論中には文章上の変更がないことが、その論拠をなす。……フランス語版でこの二つの箇所が削除された理由については、私はまだ最終的結論に達しない。これら両文章に誤謬があるとは考えられないが、意識への反映について、より積極的な展開を、フランス語版での修正時点でマルクスは考慮していたのかもしれない。物神性論が「言語」に言及しているだけに、このような推測がうまれるのである。」(前出, p. 111.) だが私には氏のこの「推測」も意味のないものと思われるのである。

6. D. S. 90. ②. Z. 1—4. 訳. P. 102. 「このような諸形態こそはまさにブルジョア経済学の諸範疇をなしているのである。それらはこの歴史的に規定された社会的生産様式の、商品生産の、生産関係についての社会的に妥当な、したがって客観的な諸思想形態である。」

F. P. 30. I. ③. L. 1—6. 「ブルジョア経済学の諸範疇は、それが実在的社会諸関係を反映するかぎりで客観的の真実を有する理性諸形態であるが、この諸関係は商品生産が社会的生産様式である、この歴史的に規定された時代にのみ特有である。」

7. D. S. 93. ②. Z. 1—7. 訳. P. 106. 「諸商品生産者の一般的な社会的生産関係は、かれらの諸生産物を諸商品として、したがって諸価値として取り扱い、この物象的な形態においてかれらの私的諸労働を同等な

人間の労働として互いに関連させるとということにあるのであるが、このような諸商品生産者の社会にとっては、抽象的人間の礼拝を含むキリスト教、ことにそのブルジョア的發展であるプロテスタンティズムや理神論などとしてのキリスト教が最も適当な宗教形態である。」

F. P. 31. II. ②. Z. 1—12. 「宗教的世界は実在的世界の反映にはかならない。労働生産物が一般的に商品の形態をとり、その結果、諸生産者間の最も一般的関係がかれらの諸生産物の諸価値を比較し、この諸物の外皮のもとに相等しい人間の労働という資格でかれらの私的諸労働を相互に比較するという点に存する社会、このような社会は、抽象的人間の礼拝をともなうキリスト教において、特にそのブルジョアの類型であるプロテスタンティズム、理神論等において最も適当な宗教的補完物を見出すのである。」

8. D. S. 94. ①. Z. 9—12. 訳. P. 106. 「しかし、そのためには、社会の物質的基礎または一連の物質的存在諸条件が必要であり、この諸条件そのものがまた一つの長い苦悩にみちた発展史の自然発生的な所産である。」

F. P. 31. II. ②. L. 44—47. 「しかし、それは、社会において、一連の物質的存在諸条件を必要としており、この諸条件自体は一つの長い苦しい発展の所産のみありうる。」

附注。Gallimard 版. p. 614. 編注1 (pp. 1639—1640.) 参照。そこに曰く。「原文はここでは、翻訳よりもより明白にのべている。」

9. D. S. 94. Fußnote 31. 訳. P. 107. この脚注のはじめにつきのこれに該当するフランス語版脚注では冒頭の1パラグラフが附加されている。

F. P. 32. I. note 1.

附注。このフランス語版における附加分は——Gallimard 版. p. 615 の編注1 (p. 1640.) で指摘されているように——D. S. 65. Fußnote 17a に「要約されて」ある。前出の第3節、項目10を参照。

10. D. S. 95. Fußnote 32. 訳. PP. 108—9. [ちなみにこの文中の「諸真理」は、第2版では「真理」]

F. P. 32. 上記の脚注がない。

附注。これはフランス語版では p. 28. I. note 1 として掲出されている。前出の第3節、項目30を参照。

11. D. S. 97. ②. 全文. 訳. PP. 110—1. 「商品形態は、ブルジョアの生産の最も一般的で最も未発展な形態であり、それだからこそ、今日と同じように支配的な、したがって特徴的な仕方ではないにせよ、早くから出現するのであって、そのためにその物神的性格はまだ比較的容易に見ぬかれうるように思われるのである。それよりもっと具体的な諸形態では、この単純性の外観さえ消えてしまう。重金主義の幻想はどこからくるのか? 重金主義は、金銀から、それらが貨幣としては社会的生産関係を、といっても特別な社会的属性をもった自然物の形態で表わしているということを見てとらなかつた。また、近代の経済学は、高慢に重金主義を冷笑してはいるが、その物神崇拜は、それが資本を取り扱うやいなやたちまち明白になるのではないか? 地代は土地から生まれるもので社会から生まれるのではないという重農主義の幻想が消えたのは、どれほど以前のことだろうか?」

F. PP. 32. II. ③. L. 1.—33. I. ①. L. 11. 「私たちの社会において、労働生産物に附着している最も一般的で最も単純な経済的形態である商品形態は、悪意がそれにみとめられないほど誰にも親しいものである。他のより複雑な経済的諸形態を考えてみよう。たとえば、重商主義の幻想はどこから生じるか? あきらかに貨幣形態が貴金属に印する物神的性格からである。重商主義者の物神崇拜に反対してひどく才気をてらい気のぬけた冗談をくどくどくりかえすことに疲れをしらない近代の経済学は、外観にだまされることはより少ないか? その第一のドグマは、たとえば、物、労働用具がその本性上資本であるということ、またそれらからこの純粋に社会的な性格を剥ぐことを欲する人は、自然侵害罪をおかすことになるということなのではないか? 要するに、重農主義者は、たとえ多くの点ですぐれているにしても、土地の地代は人間から取りあげられた貢物ではなくて、土地所有者に自然そのものによってなされた贈り物であると考へなかつたか?」